

〔77〕男たちが沸かせた

世界バレエフェスティバル2006

2006年9月2日 東京新聞 夕刊本質に

今年の世界バレエフェスティバルの年だった。三年に一度、世界の人気スターや注目すべき振付作品が一堂に会する公演。まさにバレエの現在と未来が示される祭典だが、今回は男性ダンサーのめざましい存在感を目の当たりにして、改めて舞踊の本質について考えた。

日本では、バレエは踊るにしても観るにしても若い女性のものだと思われているようだが、元来は男性のものである。少なくとも歴史的にはそうだった。

バレエが発祥した当時、踊っていたのは貴族の男性だった。ルイ十四世を主人公にした映画『王は踊る』の中に「フロンドの乱で反逆した貴族の息子たちが、今は王を囲んでバレエを踊っている。めでたいことだ」という台詞があるが、バレエとは国家と王権の確立を称揚するデモンストレーションだった。

バレエが宮殿が市中に出ても、スターはやはり男性が中心だった。十八世紀、デュプレやヴェストリスなどダンスの神様と騒がれた男性は複数いたが、女性ではひとりカマ

〔77〕 男たちが沸かせた

世界バレエフェスティバル2006

2006年9月2日 東京新聞 夕刊本質に

ルゴが短かめのスカートで男性のように跳ねて一世を風靡した。ダンスは身体能力が重要だから、昔も今も男性の活躍の場にはこと欠かない。

バレエで女性が前面に踊り出たのは、十九世紀のロマンティック・バレエの時期である。ポワント（爪先、トゥシューズ）を使って足が地についていないように見せたのが、時の新興ブルジョワのお気に召した。とはいえ、女性が宙を舞うためには後ろで男性ダンサーが持ち上げる（リフト）必要があったわけだ、この時から男性ダンサーは陰の存在となり、かつ大きな重荷を負うこととなった。男性ダンサー受難の時代である。

しかし、まもなくニジンスキーという何代目かのダンスの神様によって男性が復権する。二十世紀は男性ダンサーの時代など、こと新たに騒がれたものだが、何のことはない、じつはそれが本来の姿だったのだ。

歴史はこれくらいにして、本題の世界バレエフェスティバル。まず作品の面白さと見事

〔77〕 男たちが沸かせた

世界バレエフェスティバル2006

2006年9月2日 東京新聞 夕刊本質に

な演技で他を圧したのがマニユエル・ルグリアがオレリー・デュポンと踊った『扉は必ず…』（キリアン振付）である。十八世紀の意味深長なフラゴナールの絵『かんぬき門』を、斬新な現代テクニクで動画化していく。静止画をスローモーションで変容させ、あるいは急速な技法で展開させると、そこに何とも微妙なニュアンスがにじみ出て、まさに十八世紀の二十世紀による卓越したパロディになった。

フィリップ・バランキエヴィッチの活躍も印象に残る。日常をやゆ揶揄した現代作品『レ・ブルジョワ』（コーウエンベルグ振付）は、無頓着な物腰と難技とのこんこう混淆が絶妙で、笑いながら感嘆させられる。一方、彼がアリーナ・コジヨカルと踊った『オネーギン』（クラニコ振付）では、厭世的な美青年の憂鬱をまことに端正に表現。正統と独創を併せ持つ芸風を存分に発揮していた。アレクサンドル・リアブコとイヴァン・ウルヴァンによる『作品100』モーリスのために』は、ノイマイヤーがベジャールへのオマージュとして振り付

〔77〕男たちが沸かせた

世界バレエフェスティバル2006

2006年9月2日 東京新聞 夕刊本質に

けた男性二人のパ・ド・ドウ。裸の上半身で背をこごめ、空を仰ぎ見て人生の道程を描き、内面の深まりを表現した。

だが一番楽しかったのはフリーデマン・フオーゲルがポリーナ・セミノワと踊った世界初演の『些細なこと』（シユブック振付）である。若々しい二人が手をつなぎ、巧妙に絡み合い、相手の体をくぐり抜けて、生きた知恵の輪のように造形を変化させる。将来が期待される人材だけに胸が躍った。

世界バレエフェスティバルでは毎回、最後にお遊びの演目が上演されるのだが、そこでは男女が役を入れ替えて踊る。今年はマラーホフやカレーニョ、マルティネスなどトップの人気を誇るスターがポイントをほき、スカートを着てカルメンやジュリエットを演じた。ふざけてはいるのだが、その裏に男性ダンサーの秘かな野心を感じないではいられない。男性のバレエにはまだまだ未踏の領域と可能性が残されている。